
人文会 ニュース

業務用

戦後思想の見取図…………… 哲学者 長谷川宏 1

新しい人文書販売の方向をさぐる

旭屋書店 片岡隆・藤原潤也 18

〈書店ルポ①〉

神田・東京堂

弘報委員会 28

'85.8 43

〈緑〉と〈非暴力〉の革命を語る！

希望のために闘う

ペトラ・ケリー／高尾利数他訳

人類の生存の道を求めて、ABC兵器、原発、農業、医療など多岐にわたる問題をとりあげ、該博な知識と実践からの考察をふまえつつ現代の危機的状況を克服する道を示す講演論文集。 1600円

●7月末刊

ペトラ・ケリー

M.シュベル／木村育世訳

〈緑の党〉の顔として、反核・エコロジー・非暴力・女性解放を訴え、世界を股にかけて活躍するペトラの、意志と情熱に溢れる半生を描く力作評伝。 1800円

春秋社 東京都千代田区外神田
2-18-6 ☎(03)255-9611

平和事典

広島平和文化センター編 戦争と平和に関する広汎な事項を収録した平和問題の基本文獻。 予五六〇〇円 350

構造主義の冒険

上野千鶴子 レヴィ・ストロースの方法を批判的に再構成。構造主義の洗練された核心がここに赴く。 三三〇〇円 250

ディコンストラクション

Ch・ノリス／荒木・富山訳 構造主義をふまえ、のりこえる方法としての脱構築。その思想の神髄。 二〇〇〇円 250

言語ゲームと社会理論

ヴィトゲンシュタイン・ハート・ルーマン 橋爪大三郎〈主体〉や〈世界〉を産み出す言語ゲームを軸に新しい社会理論を構想する。 二三〇〇円 250

東京文京 勁草書房 振替東京
後楽2-23 5-175253

子供！

スタジオアヌー編

親も先生も知りたい、子供たちのホントの気持。10歳から15歳までの174人の子供たちが、いじめや性の問題からマイコン趣味まで、自分の悩みと喜びを率直に語った、空前の大型インタビュー。諸紙誌で話題沸騰！ 2900円

「よい戦争」

スタッズ・ターケル 中山容他訳 パールハーバーからヒロシマまで——アメリカ人・ドイツ人・日本人……137人の「普通の人」が語る、第二次世界大戦の実像！本年度ピュリッツァー賞受賞の全米大ベストセラー。 3200円

晶文社 東京都千代田区外神田2-1-12
電話(255) 4501

俳風柳多留

(全6冊)

濱田義一郎監修 人間世界の種々相を滑稽に描き、世相人情を諷刺した日本最大の庶民文芸。川柳 初篇七五六句、二篇(六二四句)の句解と語釈付。 各560円

江戸の戯作絵本

小池正胤他編 江戸で出版された黄表紙の絵入小型本文学史的意義のある傑作計50種の黄表紙作品集。注解付全頁図版。〈全6冊完結〉640頁 680円

社会思想社

東京文京本郷1-25・電話813-8105

戦後思想の見取図

哲学者 長谷川 宏

近年とみに本屋が本のファッション・ショーのおもむきを呈してきた。派手なよそおいの雑誌や新刊書が覇をきそわんばかりにならんでいる。

時代のながれでもあろうし、営業上の都合もあろうが、わたしのようないささか古風な読者はおいそれとファッション・ショーをたのしめない。本をアクセサリの一

種とかんがえたり、本に流行のおもしろさを感じたりする人がいていっこうにかまわないが、自分としてはそこになにほどの文化的な価値を発見し、確認し、他人につたえ、また他人からおそわりたいというおもいをすてがたい。戦後民主主義の時代的な雰囲気をごく自然にうけいれつつ生いそだったわたしには、本とはなによりも

人格と文化にかかわるものであり、だから古典こそが本のなかの本なのであった。年とともに自分のよみくせにさまざまな変形が生じたのはたしかだが、本に文化的思想的な価値をみようとする固定観念は根づよくのこっている。

そういう人間が、「人文科学」ないし「思想」の名をかかげた書棚にはこういう本がならんでいてほしい、そうおもってつくったのが、以下の戦後思想の見取図である。便宜上、外国の思想家については流派別に、日本の思想家については主題別に区分けした。

A、外国の思想

一、マルクス主義

よくもあしくも、マルクス主義は戦前戦後にわたって日本の現代思想にもっともおおきな力をおよぼした思想である。歴史を総体として対象化しようとする唯物史観、精緻な資本主義経済構造の分析、人間と人間、人間と自然とのあいだに横たわる本質的な矛盾に目をこらす疎外

論、理論から実践へ、そして実践から理論へとたえずゆききする政治論、等々が、日本の、とくに知識人にあたえた影響は容易にはかりがたい。

マルクスその人の思想については、時代によって視点や力点のさまざまに異なる解釈がこころみられたが、基本文献としては、『経済学・哲学草稿』『ドイツ・イデオロギー』『共産党宣言』『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』『経済学批判』『資本論』などをあげることができよう。

マルクスの革命理論を政治的実践のみちびきとし、政治世界のただなかにあつて政治の矛盾をマルクス主義的に解決しようと苦闘した思想家に、レーニンと毛沢東がある。かれらの著作は、思想の書としてのみならず、それぞれに、ロシア革命と中国革命の普遍性と特殊性をおのずからうつしだす書物として興味ぶかい。現在の社会主義国家にレーニンや毛沢東のような、政治家にして思想家であるといった指導者のいないことは、社会主義が体制と化している事実の一証左といえるかもしれない。

唯物弁証法を文学や美学の領域に大胆に適用し、芸術と社会の相関関係にあらたな光をなげかけたのが、ハン

ガリーの哲学者ルカーチである。ときに図式的にすぎたり、政治的価値が幅をきかせすぎる欠点もなくはないが、マルクス主義の可能性をおおきくおしひろげた思想家として逸することができない。

マルクス思想の基本線をうけいれつつ、政治論、社会論、芸術論、文明論、等々の分野で独自の問題提起をおこなってきた研究集団にフランクフルト学派がある。顔つきもちがえば肌あいもちがう反ナチの思想家たちのゆるやかなつながりがその名でよばれるのだが、かれらに共通するのは、資本制近代への批判と理性への信頼の一貫性である。この派を代表する人びととして、ホルクハイマー、アドルノ、マルクーゼ、ハーバマス、ペンヤミン、などがあげられる。

ほかに、プロッホ、グラムシやアルチュセールなどがある。

二、実存主義・現象学

疎外の問題を人間の内面性にそくしてあきらかにしようとする実存主義は、敗戦後の混乱と貧困のなかで人び

との心をつよくとらえた。マルクス主義が人間疎外を社会にむかって克服しようとするものだとなれば、実存主義はこれを主体の思想性によって克服しようとするものだということができる。

実存主義は現象学と密接な関係にあり、主体の危機や実存の不安や人間の有限性を説く実存哲学者たちは、同時に、人間の意識構造や心的過程の精密な探究家であった。

実存の哲学は、正統的な体系の構築にいたらなかったものが多いが、そのことにも、現代の不安と混乱にあくまでもつきしたがおうとするこの哲学の異端性があらわれている。

実存主義といえば、その先駆をなすキルケゴールとニーチェの名を逸することができない。キルケゴールは信仰ふかき実存思想家、ニーチェは無神論を標榜する虚無の思想家という明確なちがいがあがるが、ともに、現存の人間の無惨と絶望から目をそらすことなく、そこになお価値あるものをみいだそうとした思索家であった。日常の安楽のなかにふときざす不安と恐怖、そして不安と恐怖のうちにこそみいだされる人間の真実、そうした、いわ

ば人間の影の部分をキルケゴールとニーチェは想像力ゆたかな文体でさまざまな視角から表現しようとした。

そのふたりとは対照的に、意識になにかがあらわれ、意識がそれにかかわり、それをみつめ認識し、さらに、それをとりかこむもの、その背後にあるものへと関連づけていくありさまを、客観的に冷静に分析したのが現象学の創始者フッサールであった。

フッサールの関心が認識の問題にかたむいていたのにたいして、その弟子ハイデガーは、存在の問題を哲学の中心にすえた。人間とはどのような存在であり、人間にとって世界とはどのようなものであり、そして、そもそも「ある」とはどういうことなのか。そうした問題をめぐって、ハイデガーは延々とかんがえつづけた。

ハイデガーの人間存在論を精神医学の領域に応用することによって、ピンスワンガーは精神病の研究にあらたな視野をきりひらいた。

フランスの実存主義者サルトルは、文学、演劇、哲学、政治、と多方面にわたるはなばなしい活動のゆえに、日本でも、多くの知識人の関心をかきたててやまぬ思想家であった。複雑に屈折し、ときにはげしく、ときにはお

だやかにかたりだされるその思想に一貫して底流するものは、人間の自由をひとつの価値としてまもりぬこうとする不拔の意思であった。

サルトルとならんで、戦後のフランスを代表する哲学者がメルローポンティである。その身体論や言語論は、ごく常識的に了解された事柄の背後に、幾重にもかくれた本質の相が横たわることをあきらかにして、近代的な視座の転換をはかるものであった。

三、構造主義

個人の主体にこだわりつづける実存思想とは異なって、人間の観念や行動を、さまざまな文化現象や伝統・技術とともに、ひとつの社会的な構造としてとらえようとするのが構造主義の基本的な方法論である。一九六〇年代から七〇年代にかけてフランスの思想界に勢力をえた構造主義は、構造という概念を前面におしだすことで、ヒューマンイズムや歴史主義の観点からするととらえかたとは異なる文化や歴史のとらえかたを提起した。

構造主義はソシュールの言語学の方法にまなぶところ

がおおきかった。ラングとパロールの区別、通時態と共時態の区別などは、構造をうきたたせるのにはほとんど不可欠の概念装置となった。

ソシュールの方法を主武器に、未開社会の制度・習俗や人びとの共同意識・共同観念を統一的な連関のもとにとらえてみせたのが、文化人類学者レヴィ・ストロースである。未開社会には、おくれた、おとった制度や文化や観念があるのではなく、近代社会とは異質な、しかしそれとしてまとまった、必然的な社会構造があることをレヴィ・ストロースはあきらかにした。

レヴィ・ストロースの分析に触発されて、構造主義的な手法はさまざまな分野に適用された。さきにあげたアルチュセールは、『資本論』を構造主義的によみなおすというところみに出たし、ラカンが精神分析の領域に構造の概念を生かそうとした。また、バルトは文学のありようや流行のありようを構造の変化と転換という側面からあきらかにしようとし、デリダは、ソシュール言語学をひきつぎつつ、言語の起源と本質に、書くという行為の側からせまろうとした。

構造主義的手法によって近代ヨーロッパの文化秩序を

再検討し、ヨーロッパ思想史の根本的な書きかえをめざしたのが、フリードである。狂気、監獄、性、といった、これまであまり光をあてられることのなかった領域に着眼しつつ、文化の根底にあつて人びとの心のなかをも支配する秩序、その秩序を構造的に析出する作業を、かれは、考古学的手法と名づけている。

四、分析哲学・記号論

ことばの研究は、二十世紀の哲学のおおきな主題である。

分析哲学ないし記号論の名でよばれるのは、ことばをもっぱら論理的数学的に分析する流派をさしている。その分析によってことばの論理構造があきらかになるとともに、形而上学的な命題の虚偽性が暴露されるとかれらはかんがえた。言語分析の成果がコンピュータやワープロに生かされているのはいうまでもない。

言語分析をたんに技術的な練磨におわらせることなく、ことばと思考とのかかわりにおもいをひそめ、独自の哲学的言語観を提起した思想家として、ヴィトゲンシュタ

インとラッセルのふたりをあげることができる。確実なことのみをかたろうとするヴァイトゲンシュタインの文章は、ひどく偏狭にみえることもあるが、ひとたびその視点を共有すると、世界の輪郭がくっきりとうかびあがるかのような透徹性をもっている。同様に、人間論や社会論では常識的なおだやかさにつつまれたラッセルの議論も、言語や論理を主題とするときは、歯ぎれのいいわりきりかたをしめす。

ヴァイトゲンシュタインやラッセルの著作からはそれぞれに思想家の個性といったものがよみとれるが、以後の分析哲学者や記号論者からは、思想的な個性をよみとりにくく、個性はむしろ分析の手法や図式のくみたてかたといった技術面にあらわれる。で、以下では、分析哲学ないし記号論の代表作の名をあげるにとどめよう。『言語・真理・論理』（エイヤー）、『意味の意味』（オグデン、リチャーズ）、『言語と現実』（アーバン）、『記号と言語と行動』（モリス）、『論理学の方法』『言語と対象』（クワイン）。

系統はちがうが、チョムスキーの文法理論も、右の人物たちと共通する言語への関心からうまれたものともみな

すことができる。

五、精神分析

フロイトの唱導した精神分析理論は、二十世紀の思想界において、たんに精神医学の理論というだけでなく、社会論、文明論、芸術論、言語論上の方法としてひろくうけいれられた。これまであげた人びとのなかで、マルクーゼ、ビンズワンガー、ラカンなどはとくに、精神分析理論から多くのものをえてきている。日本でも、あるいは性の書として、あるいは心理の書として、あるいは制度の書として、ながくよみつがれてきている。フロイトのあくのつよさがこの理論の魅力のひとつをなしていることはまちがいない。

無意識の領域が人間の思想や行動を根底的に支配するとかんがえるのが精神分析の基本構想だが、無意識の領域の核をなすのがなにかという点で、さまざまな分岐が生じた。性欲的なリビドーを核とみなすフロイトにたいして、アドラーはむしろ権力意志や幼児期の無力感を重視し、ユングは過去の体験よりもむしろ未来にかかわる

主体性や集合的無意識をおもんじた。

また、フロムをはじめとするアメリカの精神分析学派は、フロイト、アドラー、ユングの理論がいずれも個人の経験におもきをおきすぎると批判し、精神の発達と性格の形成に社会経済的な条件が重大な影響をおよぼすことを強調した。この派は、新フロイト派、あるいはフロイト左派とよばれる。

六、その他

歴史と社会のありようにするどい目をそそぎ、日本の思想界にもすくなからぬ衝撃をあたえた思想家として、ヴェーバー、デューイ、カー、ミルズ、アレント、イリッチ、などをあげておきたい。

B、日本の戦後思想

一、市民の思想

戦後日本の思想は、戦前の天皇制ファシズムへの反省

にたつて、人種と平和と民主の思想をいっばいにうけられて出発した。マスコミも教育界もこの思想を大々的にうけいれ、すくなくも一九六〇年ごろまでは、文化のさまざまな側面でこの思想の指導性が発揮された。戦後の政治闘争の頂点をなす六〇年安保闘争も、その内実をなすのは、人権と平和と民主の思想であつたし、その後も、ベ平連の活動や各地の住民闘争にこの思想がうけつがれている。

この思想をかりに市民の思想と名づけるとすれば、市民の思想の唱導者ないし擁護者は枚挙にいとまがなく、戦後の代表的な雑誌「中央公論」「世界」「展望」「思想の科学」で、市民の思想はながく主流の位置をしめてきた。西洋近代の人権思想を核とするこの思想は、日本の大衆の意識とは容易にむすびつかない面をもちながらも、知識人の世界では、その自由な作風が異質の思想や異質の分野の交流をうながすのに役だった。

清水幾太郎のように、この思想の唱導者からやがて国家主義の擁護者へと変貌していく例もないが、市民の思想の代表的イデオログたちはおのれを持すことかたく、現在でも、管理への批判と抵抗の思想として生

きつづけている。

ひとにぎりの代表者たちをあげれば、羽仁五郎、久野収、武谷三男、日高八郎、鶴見俊輔、小田実、高島通敏、といったところになろうか。

二、政治思想史論

市民の思想は、戦後のアカデミズムにもひろくうけいれられ、また逆に、アカデミズムを論壇へとおしだす力として作用した。

丸山真男は市民の思想の立場にたつ政治学ないし政治思想史を確立したもっとも重要な学者思想家である。戦前の天皇制ファシズムにたいする鋭利な批判的分析のみならず、日本の思想を総体としてとらえ、その本質を正確なことで表現するところにその政治学のおもしろさがある。知識人の政治参加のあやうさも丸山真男にはよくみえていた。

丸山門下には、幾人ものすぐれた思想史研究者、近代史研究家があらわれた。橋川文三はみずからのファシズム体験を反芻するなから日本浪漫派批判を展開し、さ

らに日本近代と戦争との関係について論究をふかめた。

石田雄は、戦後日本のさまざまな組織にみられる民主主義の脆弱さを指摘する一方、明治以降の政治思想史の変遷を綿密にたどる作業に力をこめた。思想の科学グループの名著『転向』執筆の中心メンバーのひとりでもあった藤田省三は、戦前から戦後にかけての知識人の動向にするどい批判の目をむけるとともに、そういう知識人をつくりあげる社会的基盤たる天皇制国家の構造について、明治の近代国家生成期にまでさかのぼって分析をこころみた。民俗学になみなみならぬ関心をもつ神島二郎は、主として庶民の行動様式と意識のありようという視点から、近代日本の構造を解きあかそうとした。かれのうちにも、橋川文三と同様、戦争体験を思想化したいというはげしい欲求がある。

丸山門下ではないが、無名の民衆の混沌たるうごきこそが歴史の基盤をなすとして、日本近代の思想史を民衆思想史としてえがきだそうとした近代史家に色川大吉と安丸良夫がある。かれらの目は、つねに、権力からはずれたところにいる有名無名の人びとにそそがれていた。

三、経済・社会の思想

経済学や社会学は典型的に外来の学問であり、その学問に拠って日本の現状をながめるとき、まず目につくのは日本の近代化のおくれ、近代意識の未成熟ということであった。六〇年代の高度経済成長以降、日本の近代化にかんしてそれまでとは異なる思考の枠組が要求されるようになってきたのはたしかだが、洋の東西の比較という観点から近代化をかんがえるところのみの有効性がうしなわれたわけではない。

社会学の分野でこの傾向を代表するのは、すでにあげた清水幾太郎、日高八郎、などである。六〇年代以降は、日本社会を総体として問題にするよりも、政党、部落、マスコミ、宗教団体、等々、個々の具体例にそくして、その内部や周辺の人びとのうごきや意識を実証的にあつづける方向が前面に出てきている。

経済学者としては、大塚久雄、高島善哉、内田義彦、などの名があげられる。マルクスとウェーバーにまなび、西洋の近代化の歴史を社会経済的に、また思想的に研究

した大塚久雄は、日本の近代化について、主として資本主義の跛行的発展という視点から批判をくわえた。高島善哉は、マルクスの唯物史観によりつつ、歴史における階級の力と重要性にくわえて、民族の力と重要性を強調した。内田義彦は、アダム・スミスとマルクスの研究をとおして、学問としての経済学の価値と可能性をたえず問題とし、歴史と経済学史の照応ぶりと矛盾にするどくきりこんだ。社会のありかたと学問のありかたを統一のとらえようとする視点は、日本近代の思想史の研究においても、斬新なきり口をしめした。

『資本論』の研究として、宇野弘藏の仕事を選することはできないだろう。

四、歴史の思想

戦前の皇国史観へののげしい反発と深刻な反省から、戦後の歴史学は一時期唯物史観がいきおいをえた。マルクスの図式をあてはめることに急だった研究は、やがて実証的なつめを重視する段階にいたり、いまやその傾向はいよいよつよい。で、素人の目からみると、事実のお

もしろさはおしえられるが、歴史のみかたのおもしろさはなかなかつたわらないという研究が多い。

なかで、歴史のながれをおおきくとらえる目と、事実を綿密にあとづける実証的な目がふたつながらに生きている歴史家といえば、思想史の領域で津田左右吉、家永三郎など、古代史で石母田正、北山茂夫、中世史で林屋辰三郎、佐藤進一、網野善彦、近世史で高尾一彦などがあげられる。戦後の出版界で、いわゆる歴史ブームなるものが何回かおこり、右にあげた歴史家たちの多くは、そうした機会に啓蒙的な概説書を書いてもいるが、啓蒙書だからといって調子がおちず、かえって史観の特色がくつきりうかびあがることさえあるのはさすがというべきである。

日本女性史の研究としては、異色の民間研究者、高群逸枝の業績をあげなければならない。

西洋史学にあつて、異国の文化や思想への興味をおのずとかきたててくれる史家としては、増田四郎、阿部謹也などがある。

五、民俗の思想

西洋ふうの市民の思想が人びとをとらえていくなかで、日本の伝統的な文化や思想や習俗をほりおこし記録しようとする努力も一方ではつづけられてきた。民俗学研究はその重要な一分野をなしている。

ここでは、戦後の研究は戦前の研究をごく自然にひきつぐかたちでおこなわれた。戦前に一家をなしていた柳田国男や折口信夫は、戦後も踏査をすすめつつ、自分たちの研究の集大成をなすような著作を発表した。かれらの研究がひろく人びとの関心をよぶようになるのは、戦後もしばらく時がたってからのことであつた。

戦後の近代化は、日本のふるい文化や習俗をつぎつぎと解体あるいは変形しつつすすむものだったが、柳田、折口などに触発された多くの研究者たちが、ふるい日本をたずねて、農村に、山村に、漁村に、足をほこんだ。

瀬戸内の小島の出身の宮本常一は、故郷の生活と文化の意味を綿密に反省し吟味するとともに、日本各地の農山漁村の生活や文化を比較検討し、民衆の生活の厚味を

重層的にえがきだそうとした。瀬川清子は、女の生きかたという独自の観点から日本の民俗をたずね、つぎつぎと興味ぶかい報告を発表した。

たんに個々の具体的な習俗文化を記録するというにとどまらず、アジアにおける日本の位置、あるいは、世界における日本の位置にまでもいをおよぼしつつ民俗の人間的な価値と意味を問おうとした民俗学者に石田英一郎、谷川健一などがある。このいきかたは、日本の民俗学と欧米ふうの文化人類学との接触をふかめるうえでもおおきな力となった。

六、言語の思想

いわゆる言語学の枠にとらわれないで、言語への関心が文学や思想や文化や人間社会への関心とわかちがたくつながるような言語研究がいくつかあらわれている。

その先駆ともいえるべきものが国語学者、時枝誠記の言語過程説である。現象学の方法論をとりいれ、ソシユールを痛烈に批判し、日本語の文法を根本的に見なおそうとするその理論は、いまなお、知的な刺激にみちいて

る。三浦つとむはその言語過程説をひきつぎつつ、さらに言語と認識との関係、言語と記号一般との関係へと、考察の輪をひろげていった。

古代日本語の研究者、大野晋は、日本語の変遷を丁寧に跡づけるなかから、日本人がことばとどのような付き合い、どのような感情や意思をことばにこめようとしたかを問おうとした。また、日本語の系統についても独自の見解を発表している。

外国語の研究や外国の言語理論の研究にもとづいて、言語と思想と文化について柔軟な思考を展開している人物に、外山滋比古、丸山圭三郎、田中克彦などがある。それぞれ、英米、フランス、ドイツの言語理論にまなぶところの多い論者たちだが、それがおのれの言語観として根づいているところに、かれらの本を安心してよめるゆたかさがある。演劇の当事者の立場から身体と言語の関係を問う異色の言語思想家として、竹内敏晴があげられる。

七、精神医学の思想

精神科の医師をしながら、時代や文化の動向について

斬新なもののみかたを披瀝する人びとがすくなくない。精神の病が時代状況を反映するのが、現代のおおきな特色なのかもしれない。そうした著作から感じられるのは、異常のなかの正常、正常のなかの異常、といったたえざる往復の印象である。主だった人物たちの名のみ列挙すると、なだいなだ、宮本中雄、小此木啓吾、土居健郎、岸田秀。

八、文学の思想

いまは、たのしみのための文学が主流をなしているようだが、戦後の文学は、ながく、人生や政治や歴史や時代について幅ひろくかんがえようとする力を持続してきた。文学と思想は自由にゆききするものだった。ゆききのありさまをさながらに体现し、書く行為をつうじて文学の可能性と思想の可能性におもいをこらしてきたのが批評とよばれる仕事にはかならない。

主だった批評家を、これも名のみ列挙すると、小林秀雄、桑原武夫、埴谷雄高、竹内好、花田清輝、寺田透、谷川雁、江藤淳、吉本隆明などがあげられる。

● 文献表

- マルクス『マルクス・エンゲルス全集』（経済学・哲学草稿）『ドイツ・イデオロギー』『共産党宣言』『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』『経済学批判』『資本論』（大月書店、岩波文庫、青木文庫、ほか）
- レーニン『レーニン全集』（『国家と革命』『帝國主義論』『なにをなすべきか？』（大月書店、岩波文庫）
- 毛沢東『実践論・矛盾論』（国民文庫）
- 『新民主主義論』（外文出版社）
- ルカーチ『歴史と階級意識』（未来社、白水社）
- 『わかきヘーゲル』（白水社）
- 『美学』（勁草書房）
- ホルクハイマー『道具理性批判』（イザラ書房）
- 『理性の腐蝕』（せりか書房）
- アドルノ『権威主義的パーソナリティ』（青木書店）
- 『ミニマ・モラリア』（法政大学出版局）
- マルクーゼ『エロスの文明』（紀伊国屋書店）
- 『一次元の人間』（河出書房新社）
- 『ユートピアの終焉』（合同出版）
- ハーバマス『認識と関心』（未来社）
- 『イデオロギーとしての技術と科学』（紀伊国屋書店）

ベンヤミン『暴力批判論』（晶文社）

『複製技術時代の芸術』（晶文社）

『文学の危機』（晶文社）

ブロッホ『希望の原理』（白水社）

グラムシ『父から子どもたち』（晶文社）

アルチュセール『資本論を読む』（合同出版）

『甦えるマルクス』（人文書院）

キルケゴール『キルケゴール著作集』（『死にいたる病』『不安の概念』『あれか、これか』（白水社、岩波文庫）

ニーチェ『ニーチェ全集』（『悲劇の誕生』『善悪の彼岸』『權力への意志』（理想社、白水社、岩波文庫）

フッサール『イデーン』（みすず書房）

『デカルト的省察』（みすず書房）

『経験と判断』（河出書房新社）

ハイデガー『存在と時間』（理想社）

『森の道』（理想社）

『ニーチェ』（理想社）

ビンスワンガー『精神分裂病』（みすず書房）

『現象学的人間学』（みすず書房）

サルトル『存在と無』（人文書院）

『聖ジュネ』（人文書院）

『弁証法的理性批判』（人文書院）

メルローポンティ『知覚の現象学』（みすず書房）

『シーニュ』（みすず書房）

『意味と無意味』（国文社）

ソシュール『一般言語学講義』（岩波書店）

レヴィ・ストロース『野生の思考』（みすず書房）

『構造人類学』（みすず書房）

『神話学』（みすず書房）

ラカン『エクリ』（弘文堂）

バルト『零度のエクリチュール』（みすず書房）

『モードの体系』（みすず書房）

デリダ『根源の彼方へ』（現代思潮社）

『エクリチュールと差異』（法政大学出版局）

フーコー『狂気の歴史』（新潮社）

『言葉と物』（新潮社）

『監獄の誕生』（河出書房新社）

ボードリヤール『消費社会の神話と構造』（紀伊国屋書店）

『象徴交換と死』（筑摩書房）

ヴァイトゲンシュタイン『論理哲学論考』（法政大学出版局）

『哲学探究』（大修館書店）

ラッセル『数理哲学序説』（岩波文庫）

エイヤール『言語・真理・論理』（岩波書店）

オグデン、リチャーズ『意味の意味』（刀江書院）

モリス『記号と言語と行動』（三省堂）

クワイン『論理学の方法』（岩波書店）

フロイト『フロイト全集』『精神分析入門』『続・精神分析入門』

『夢判断』（日本教文社、人文書院）

アドラー『現代人の心理構造』（日本教文社）

ユング『心理学と宗教』（日本教文社）

『心理学と錬金術』（人文書院）

『ユング自伝』（みすず書房）

フロム『自由からの逃走』（東京創元社）

『精神分析と宗教』（東京創元社）

『正気の社会』（社会思想社）

イリッチ『脱病院化社会』（晶文社）

『シャドウ・ワーク』（岩波書店）

バーク『動機の文法』（晶文社）

清水幾太郎『愛国心』（岩波新書）

『現代の経験』（現代思潮社）

『現代思想』（岩波全書）

羽仁五郎『ミケルアンジェロ』（岩波新書）

『日本人の歴史』（岩波新書）

『都市の論理』（勁草書房）

久野収『戦争の論理と平和の論理』（岩波書店）

『三〇年代の思想家たち』（岩波書店）

武谷三男『弁証法の諸問題』（勁草書房）

『安全性の考え方』（岩波新書）

日高六郎『現代イデオロギー』（勁草書房）

『戦後思想と歴史の体験』（筑摩書房）

『戦後思想を考える』（岩波新書）

鶴見俊輔『日常的思想の可能性』（筑摩書房）

『不定形思想』（文藝春秋）

『限界芸術論』（勁草書房）

小田実『何でも見てやろう』（河出書房新社）

『戦後を拓く思想』（講談社）

『世直しの論理と倫理』（岩波新書）

高島通敏『政治の論理と市民』（筑摩書房）

丸山真男『日本政治思想史研究』（東京大学出版会）

『現代政治の思想と行動』（未来社）

『日本の思想』（岩波新書）

橋川文三『日本浪漫派批判序説』（未来社）

『歴史と体験』（春秋社）

『順逆の思想』（勁草書房）

石田雄『明治政治思想史研究』（未来社）

『現代組織論』（岩波書店）

『日本近代思想史における法と政治』（岩波書店）

藤田省三『天皇制国家の支配原理』（未来社）

『維新の精神』（みすず書房）

『精神史的考察』（平凡社）

神島二郎『現代日本の精神構造』（岩波書店）

色川大吉『明治精神史』（講談社文庫）

『近代国家の出発』（中公文庫）

『明治の文化』（岩波書店）

安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』（青木書店）

『出口なお』（朝日新聞社）

『神々の明治維新』（岩波新書）

大塚久雄『近代欧州経済史序説』（岩波書店）

『近代化の人間の基礎』（岩波書店）

『社会科学における人間』（岩波新書）

高島善哉『社会科学入門』（岩波新書）

『民族と階級』（現代評論社）

内田義彦『経済学の生誕』（未来社）

『資本論の世界』（岩波新書）

『作品としての社会科学』（岩波書店）

宇野弘蔵『経済原論』（岩波書店）

『経済学方法論』（東京大学出版会）

『恐慌論』（岩波書店）

津田左右吉『文学に現はれたる国民思想の研究』（岩波文庫）

『日本古典の研究』（岩波書店）

家永三郎『日本近代思想史研究』（東京大学出版会）

『不合格日本史』（三一書房）

『太平洋戦争』（岩波書店）

石母田正『中世的世界の形成』（東京大学出版会）

『歴史と民族の発見』（東京大学出版会）

『日本の古代国家』（岩波書店）

北山茂夫『萬葉の世紀』（東京大学出版会）

『日本古代政治史の研究』（岩波書店）

『王朝政治史論』（岩波書店）

林屋辰三郎『中世文化の基調』（東京大学出版会）

『中世芸能史の研究』（岩波書店）

『日本の古代文化』（岩波書店）

佐藤進一『南北朝の動乱』（中央公論社）

『日本の中世国家』（岩波書店）

網野善彦『蒙古襲来』（小学館）

『無縁・公界・衆』（平凡社）

『日本中世の非農業民と天皇』（岩波書店）

高尾一彦『江戸幕府』（文英堂）

『近世の庶民文化』（岩波書店）

高群逸枝『招婿婚の研究』（理論社）

『女性の歴史』（講談社文庫）

増田四郎『西洋中世世界の成立』（岩波書店）

『ヨーロッパとは何か』（岩波新書）

『都市』（筑摩書房）

阿部謹也『ドイツ中世後期の世界』（未来社）

『ハーメルンの笛吹き男』（平凡社）

柳田国男『柳田国男全集』『遠野物語』『山の人生』『海上の道』

（筑摩書房）

- 折口信夫『古代研究』（中央公論社）
- 宮本常一『宮本常一著作集』（『家郷の訓』『日本の離島』『ふるさと』の生活）（未来社）
- 瀬川清子『海女』（未来社）
- 『若者と娘をめぐる民俗』（未来社）
- 石田英一郎『桃太郎の母』（筑摩書房、講談社文庫）
- 『文化人類学ノート』（筑摩書房）
- 『東西抄』（筑摩書房）
- 谷川健一『魔の系譜』（紀伊国屋書店）
- 『常民への照射』（冬樹社）
- 時枝誠記『国語学原論』（岩波書店）
- 『日本文法口語篇』（岩波書店）
- 『日本文法文語篇』（岩波書店）
- 三浦つとむ『日本語とはどういう言語か』（講談社）
- 『認識と言語の理論』（勁草書房）
- 大野晋『日本語の年輪』（新潮文庫）
- 『日本語をさかのぼる』（岩波新書）
- 『日本語の成立』（中央公論社）
- 外山滋比古『修辭的残像』（みすず書房）
- 『近代読書論』（みすず書房）
- 『日本語の論理』（中央公論社）
- 丸山圭三郎『ソシユールの思想』（岩波書店）
- 『文化のフェティシズム』（勁草書房）
- 田中克彦『言語からみた民族と国家』（岩波書店）
- 『ことばと国家』（岩波新書）
- 『チョムスキー』（岩波書店）
- 竹内敏晴『ことばが劈かれるとき』（思想の科学社）
- 『からだが語ることば』（評論社）
- 『子どものからだのことば』（晶文社）
- なだいなだ『片目の哲学』（角川文庫）
- 『権威と権力』（岩波新書）
- 『人間、この非人間的なもの』（筑摩書房）
- 宮本忠雄『精神分裂病の世界』（紀伊国屋書店）
- 『現代の異常と正常』（平凡社）
- 『言語と妄想』（平凡社）
- 小此木啓吾『対象喪失』（中公新書）
- 『家庭のない家族の時代』（ABC出版）
- 土居健郎『甘え』の構造』（弘文堂）
- 『表と裏』（弘文堂）
- 岸田秀『ものぐさ精神分析』（青土社）
- 小林秀雄『本居宣長』（新潮社）
- 『ドストエフスキイの作品』（新潮社）
- 『歴史と文学』（新潮社）
- 桑原武夫『文学入門』（岩波新書）
- 『伝統と近代』（文藝春秋）
- 埴谷雄高『鞭と独楽』（未来社）

『幻視のなかの政治』(未来社)

『架空と現実』(未来社)

竹内好『現代中国論』(筑摩書房)

『鲁迅』(未来社)

『日本とアジア』(筑摩書房)

花田清輝『復興期の精神』(未来社)

『近代の超克』(未来社)

『鳥獣戯話』(未来社)

寺田透『文学その内面と外界』(弘文堂)

『道元の言語宇宙』(岩波書店)

『道の思想』(創文社)

谷川雁『原点が存在する』(潮出版社)

『工作者宣言』(潮出版社)

『戦闘への招待』(現代思潮社)

江藤淳『作家は行動する』(講談社)

『漱石とその時代』(新潮社)

『成熟と喪失』(新潮社)

吉本隆明『高村光太郎』(春秋社)

『言語にとって美とはなにか』(勁草書房)

『共同幻想論』(河出書房新社)

岩倉具忠・清水純一・西本晃二・米川良夫

A5判 三六〇〇円

イタリア文学史

本書は、イタリア文学の発生からピランデッロ、モラヴィアなど現代の作家に至るまで全体を網羅した日本で初めての本格的イタリア文学史である。ヨーロッパ文学・文化を全体として理解する上で不可欠でありながら従来ややもすれば英独仏に偏りがちなわが国の西欧紹介の中で、不当に知られていなかったイタリア文学に初めて光を当てた通史。

ドイツ文学史

鈴木一郎・岩倉具忠・安富良之訳

古代ローマ喜劇全集 全5巻完結

①プラウトゥスⅠ②プラウトゥスⅡ③プラウトゥスⅢ④プラウトゥスⅣ⑤テレンティウス
①②各三〇〇円③④⑤各六〇〇円

藤本淳雄・岩村行雄・神品芳夫・高辻知義・石井不二雄・吉島茂

二八〇〇円

東京大学出版会

113東京都文京区本郷7-3-1
電話03-811-8814 目録呈

新しい人文書販売の方向をさぐる

今春二月、人文会（22社）と東京旭屋書店（6店舗8名）は、東京近郊で一泊の合同研修会を開きました。研修会は数カ月前から双方担当者が資料をととのえ、議題を整理してのぞみ、当日は全体会での基調報告のあと三つの分科会で討議し、さらにまよめの全体会をもつという具合で合計12時間に及ぶ「大」研修会となりました。

これほどの長時間の研修は私たちにあって久々の経験でしたが、人文・社会科学書普及の前の大きな壁は微動だにしていませぬ——が、書店さんとのこうした卒直な討議を通じて広がつてゆく共通認識こそが大きくも長くも見える壁をいつの日かつき破る力になるものと確信しています。

人文会ニュース43号では、同研修会をふまえてこれから的人文書普及の問題についてお二人の方に論じていただきました。ご多忙のなかご執筆くださった片岡さんと藤原さんに感謝いたします。

弘報委員会

●片岡隆（銀座店）

今年の出版界はかなり厳しい状況になっています。取次の方からも既存店が特に厳しい様ですね、と聞かされることが多い。

今まで順調に伸びてきた雑誌でさえも、創刊誌を含めてかなり不振です。販売部数の伸びている雑誌といえば、コミック誌や女性の裸の写真が載っている興味本位の雑

誌だけです、などと云われているぐらいです。

数年前、ニュートンをはじめとして新しい科学雑誌が、科学というものにそれほど強い関心を持っていない人も読者にとりこみ、大きな成功をもたらしましたが、最近では、そのような新しい読者を、さらに読者の絶対数を増やしてくれる雑誌の企画はほとんど見当りません。すでに売れている雑誌分野に参入してくる雑誌がほとん

どです。

そんな中で、岩波書店の「へるめす」には大きな期待をもちました。定価も書店にとって有難い値段だし、ひと味もふた味も違った雑誌の登場で、雑誌売場に新しい「知」風を吹きこんでくれるやもと大きな期待を寄せました。創刊号は、特別号とともに、どちらも三ヶタにとどくいきおいの売上を示してくれました。季刊誌ですからそれぐらいいは、といえるかも知れませんが内容からいってそう量販向きとは考えられません。問題は2号目です。

雑誌の内容からしても、編集の方針からしても、創刊号と2号目でガラッと変ってしまうようなことは有り得ないはずだと思うわけです。編集後記にも特集形式はとらず、時間をかけて執拗に問題点を追究していくと記してあります。ですが、販売結果として創刊号の3割に達することができませんでした。この現象は何を物語っているのでしょうか。

さて、書籍の方はどうでしょう。今、分野毎に見て確実に伸びているのは文庫だけではないでしょうか。文庫が伸びているのは、出版社が増えたことや出版点数が増えたこと、文庫正味を下げていることだけが原因ではな

いと思っています。私どもの店では、文庫のスペースを増やしているわけでもないがやはり伸びています。要因は、いい商品を安く読者に提供しているからです。特にいい商品を、ということが大きな要因です。というのは、どの分野でもいい商品は値段が少々高くても必ず売れます。このいい商品ということは、内容的に価値の高いものということだけでなく、読者にとって、高い価値がある商品といえそうです。

さて、本題の人文書はどうであらうか。

今、人文書の平台は非常に活気があってとても動きが良いようだ。みず書房の『日常性の構造』、白揚社の『ゲーデル・エッシャー・バッハ』など高定価の商品も含めてよく売れている。少し前には東大出版会の『日本の政治』、勁草書房の『構造と力』、筑摩書房の『戦後史 上・下』と長い期間よく売れ、そして売れ続けている商品もあります。

しかしながら、これらの人文書売場に活況を呈した商品がありながら、全体としてはかなり厳しい状況にある事も事実です。

専門書の中でも人文書は、最も代替のきかない商品で

あるといえます。

理工書の場合、技術の進歩・変化によって、例えば、「真空管」―「トランジスタ」―「IC」―「LSI」―「超LSI」といった具合に、その技術革新にともない、それに対応した商品がどんどん読者に要求され必要とされるわけです。また、ビジネス書の場合でも、その時代その時代（その間隔はますます短くなっている）の経済構造・企業構造の変化・消費者行動の変化などに対応した商品が読者に求められ、さらにこれから先の時代変化をも読みとり、対応できるような商品が求められています。又同じビジネス書でも、絵で見る何々、図解何々、社長が書いた何々といった具合に、同じテーマのもので切り口を少し変えて新しい読者をとりこんでいます。さらに、ユニークな企業成功例やトップ経営者の発想や考え方など、その時々にも生まれる本は、これからもビジネス書売場に活発な動きを呈することでしょう。

これらの理工書やビジネス書は、読んでそして見て役に立つ本、知っているのと得をする本、未来を先取りする本、読んでおもしろくなおかつ自己啓発できる本、といった本が読者をかなりひきつけている結果となっています。

こういう立場から人文書をみると、なかなか売れる要因のあてはまるものが少なく、とても厳しい時代だな、と感じてしまいます。

それではこのように厳しい状況の中にあって、読まれ方も、売り方も違う（？）人文書をどうしたら売れるようになるのでしょうか。

人文書の出版社が売れる本を出せば必然的に売れるようになるなんて簡単に割り切らないで、もう一度自分の足もとを見ても必要でしょう。

人文書は元来、個々人の意識（知識）を高めていくものだけに、一冊の本を読めばそれでよしとするわけにもいかないものだと思います。

入門書から基本書そして専門書さらに関連図書とひろがっていくものと思いますが、今の人文書の読者がそういう読み方をしてくれる、しないに関わらず、それに対応できる品揃え商品構成が一書店だけの力で十分可能であろうか。書店が人文書全ての分野で完璧に対応できることは、おそらく一部の書店だけではないでしょうか。

そして、そのような対応のできる商品構成をするにはどれだけのスペースがあれば十分なのでしょう。

スペースの問題でないことは十分承知していますが、この時代に総合書店として人文書を品揃えするには、一〇〇坪や一五〇坪では無理という方もいます。

さて、こうすればよいという答えもむずかしいと思いますが、その前にここ十年少し前ぐらいからの人文書の店頭での動きを少し振り返ってみますと、売れ方も読まれ方もかなりの変化があるように思います。

七〇年代は、外に、中国の文化大革命と紅衛兵旋風、アメリカの北爆開始によるベトナム戦争の激化、第三次中東戦争の勃発という六〇年代後半の世界をそのままひきつぎ、そして内においては、東京オリンピックの開催、東海道新幹線の営業開始、そして大阪での万博開催などを象徴とする高度経済成長の中で、授業料値上げ反対に端を発した大学紛争の激化、安保条約の自動延長など内外ともに何らかのインパクトを個人に与えていた時代でした。

そのような時代背景の中で研究者も学生も一般の人々も、社会とは、人間とは、人生とは、死について愛について、そして権力とは、ということについていや応なくなんらかの形で身に問題がふりかかった時代ではなかったでしょ

うか。

その頃、人文書でよく読まれていたものを思い出すと、和辻哲郎『風土』『古寺巡礼』『九鬼周造』『いき』の構造、サルトル『実存主義とは何か』、リースマン『何のための豊かさか』、トインビー『歴史の研究』、フロイト『精神分析入門』、ゲゼル『狼に育てられた子』といった長く読みつがれてきた本がより多く売れていました。またこれらに加えて、歴史全集とかいわゆる名著といわれるものなどをはじめとして、何々入門という教養書や啓蒙書的なものが売上げの中心をなしていたように思えます。

その後、このような入門書や教養書にかわって、それぞれの研究分野で影響を与えている人達（フロイト、ユング、フーコー、ソシュール、エリアーデ、レヴィ・ストロース、メルロー・ポンティ等）の著書が、そして吉本隆明、山口昌男、中村雄二郎、森有正といった著者の本が店頭をにぎわすようになりました。歴史の分野においても、入門書的なものから、邪馬台国やシルクロードといった、テーマをしぼりこんだ本が数多く求められ、宗教書でも精神世界の本などへ若い読者をもとりこみ新

しい拡がりを見せてきました。

また読者側にも変化がかなり見られます。かつては人文書の読者の中心であった学生が、大学受験という受験の為の勉強から解放されるや、押しつけの学問を嫌い、学園を学問の場から、社会人になるまでの生活の場、遊びの場としてうまく利用するようになりました。従って教科書も年々売上げが落ちてきており、学生自身が自主的に選択したゼミのテキストやそのゼミで紹介された本の方が、教科書よりも余程売れるなんてことはそう珍しいことではありません。

また、学生も一般読者も国内から海外へとどんどん行動半径が拡がり、それぞれの関心の対象も読書傾向にも拡がりが見られるようになってきました。今までの欧米を中心とした世界から、第三世界、中国、朝鮮、韓国という国に関心がより多く向けられるようになってきたのも七〇年代後半からではないでしょうか。また最近では、自己を深く見つめなおすという本よりも、自己と関わりのある現象、例えば、自然、都市、性、ことば、遊び、音楽、演劇といったものにより多くの自己表現の場を見出し、自己の感性や他人との差別化に合致したものが

目立って求められるようになってきた気がします。

さて人文書を売るという立場から、最近話題になった本を二、三とり上げてみたいと思います。浅田彰『構造と力』、土居健郎『表と裏』ですが、この二点はどちらもベストセラー的な売れ方をした本ですが、この本の売れ方の共通点は、心理学あるいは思想に特別関心を持っている読者だけでなく、その周辺にいる一般の読者もとりにこんでいるということです。また今売れている『ゲイデル・エッシャー・バッハ』ですがピューリツァ賞を受賞した本とはいえ、そう手の出る内容のものでもないと思われまうのでその売行きに少々おどろいています。

これらの三つの本でも『表と裏』のように『「甘え」の構造』という前著で大きな実績をもち、販売予測がある程度つかめるもの、『構造と力』のように、一部の研究者の間で高い評価を得ていたとはいえ、それがマスコミや口コミを通して話題となり売れたもの、そして『ゲイデル……』のように、その本のもつ力だけで売れるものと、いろいろな売れる要素があります。

こういったことから書店としては、その著者という人間に、あるいはその本の内容にどれくらい関心をも

つ読者層があるのか、社会に対して読者に対してどれくらい強い関心をひきおこすことができる本なのか、そして又、その本がどういった読者層に読まれるのかをできるだけ適確に判断することが、売る店売らない店の差をつけてしまうのではないのでしょうか。従って、読者の最も近くに在る書店としては、一冊一冊の本に關するいろいろな販売要素をできるだけ適確につかむために、常に情報収集というアンテナをはっていると同時に、自己の店の客層をしっかりと読みとり自己を常に磨いておく必要もあるわけです。

ここで私なりの、人文書売り伸ばしていくにはという問題についてはほんの一面の答えですが、書店と出版社、そしてその仲をとりもつ取次の担当者とか、内容のあるそしてまた、意思の通じた情報交換ができるかで、少しでも読者のニーズにこたえることのできる品揃え販売ができるようになってくるのではないのでしょうか。

最後になってしまいましたが、今回の人文会各社との合同研修会では大変お世話になりましたして深く感謝しております。またその研修会で得られたこと、お互いに出しあった要望をこれからさらに前進させるために、これか

らもよろしくご指導をお願い申し上げます。

● 藤原潤也（渋谷店）

二月二一日・二二日の二日間にわたって行なわれた当社と人文会の合同研修会の目的は、不振である人文書の販売について、書店と版元の努力のあり方を話し合うものであった。現在の販売の方法について改善されるべき事柄があれば、双方がその点について改善していこうとすることで、この不振から脱出できれば、という願いがあったように思う。

そこで私は、店頭において人文書の販売がどのような方向に向かっているのかを述べてみたいと思う。

先ほど出版された「まるで異星人」^{エイリアン}（中野収著、有斐閣刊）を読むまでもなく、社会状況、つまりは読者のニーズが大きく変化していることは誰の目にも明らかである。そしてまた、人文書は学問の体系そのものが大きな変化を迎えており、例えば、思想におけるパラダイムの変換、アナール派などによる歴史観の変化、社会科学において

は、コードの転換による新しい社会理論の成立、教育では、シュタイナーをはじめとする教育の新しい方法論が出てきているし、宗教では、精神世界からニューサイエンスへと読者が移ってきているというように、読者のテキストがはつきりとした形で変化を見せ始めているのである。つまりある意味で現在の人文書という分野は、新しい価値の誕生の中に位置付けることが可能であるし、新しい読者の注目を集める分野とも言えるのではないだろうか。それに加え、社会状況の変化、読者にとっての書店の意味、読者にとっての本の持つ意味の変化が起きている今、人文書の販売の方法というものにかなりはつきりした方向を与える必要があると思うのである。読者の質の変化に対応するために、書店の店頭はもちろんのこと、商品を生み出す版元、そして流通の要である取次店にも消費社会の転換の意味を真剣に考える時が来ていると言えるだろう。

人文書における本の持つ意味の変化は、大学教科書の売上げ不振を見れば、本が単にツールとしてしか機能していないことがわかるし、『構造と力』（浅田彰著、勁草書房刊）に見られるように、ある意味でファッション

として機能しているというところに現われている。書店は本というハードウェアを読者に売るという行為で本をソフトウェアに変換する仕事をしていると私は考えている。前述の「ツール」・「ファッション」というのはハードウェアをハードウェアとして売るということであり、本が「もの」としてしか機能していないということである。しかし本は一般商品と違い、単なる「もの」ではない。つまり本を生かすか殺すかということに我々は腐心していると考えるだろう。取次店のように本はあくまでも「もの」として扱うわけにはいかないのだ。本が「もの」として扱われる書店とそうでない書店は、本を見る目のある人なら、すぐにわかることであり、また「もの」としての本が並ぶ書店の多いことが、読者に「本屋は面白くない」、「どこに行っても同じ」という印象を与えているのではないだろうか。誤解を恐れずに言うならば、人文書は、ミイハリックなお客に買われるべきものではなく、読書の価値を認める、より文化的な読者を相手にして売られるべき性格のものである。だからこそ、「もの」としての本を買って頂くわけにはいけないのである。

さて、『進んだ流通システム』である取次店のコンピュータ

ーターによるパターン配本というものがあるが、一般書や雑誌には有効なそのシステムも、専門書においては必ずしも有効であると言ひ難い。それはパターン配本された商品は、あくまでも取次店の延長上にある「もの」としての商品であるからであり、そこには、書店の売場担当者の意志も版元営業マンの意志もない。パターン配本だけで本が売れるということがないということは版元営業マンが実感されていることであるし、パターン配本商品を書店が積極的に販売することもないのである。専門書というのはそういうものであると思う。同地区・同規模店で、同じ本の売上げにバラつきが出るのは、もちろん店の性格や客層によるが、突き詰めると、書店（あるいは担当者）の、その本に対する対応の違いにあると言

えるだろう。この対応の違いとは、人文書にあっては、まさに情報の違いなのである。冒頭で述べたが、人文書の販売は、学問そのものの変化によってかなりの情報が必要とする分野になった。私は以前、理工書の担当をしていたが、その時、情報処理、とりわけマイコン関連書籍の販売が急激に伸びた。御存知のように、マイコンの世界は日進月歩で、急速な変化が書籍に反映され、今日出版された本が、明日にはもう古いという状況があった。その当時の品揃えに不可欠だったものが最新の情報であり、展示商品の先読みだった。その情報や判断材料は自分ひとりでは集められるものではなく、多くは版元営業マンから得たのである。もちろん、技術書と人文書を同列に考えることは出来ないが、定本だけ補充するとか、話

人の織りなす粗布を鋭敏な眼が染め分ける。
そこに浮き出る紋様は……。

蜃気楼の中へ

遅ればせのアメリカ体験

西部邁

日本とアメリカを隔てる文化のズレ、その断層に宿る北海道やインドの記憶の断片、そこに亀裂を生じさせるイギリスやハンガリーでの体験……さまざまな文化の格差が醸し出す蜃気楼の中へ、不羈の経済学者が一切の固定観念を懐疑しながら進んでいく二年の旅。

4・6判上製 定価＝1300円
好評発売中

モロツの浜辺
ジャンキーたち
オールドカプトル
わがはらから
UIC パークレイ
夢のあと
小泉六郎
流れつくへびと
イギリスへ
反進歩への旅



日本評論社

東京都新宿区須賀町14丁目160
電話341-6161(代表) 振替東京0-16番

題の本を平積みするとか言う、マニュアル作業的な仕事だけで、人文書の販売は出来ない。特に思想書においては、かなりの先読みを必要とされるし、最も変化の大きいジャンルになっているのが現状である。その情報を得るのは、やはり版元営業マンであることは間違いない。また書店での状況を版元に知らせるのは書店の義務であると考えるのである。人文会合同研修会においての最大の話題は、この版元と書店のコミュニケーションの問題であったということは、現在の人文書の販売のウィークポイントがここにあると言えるだろう。

最近あった二件の具体的な例が、版元と書店のコミュニケーションのあり方を示すよい例になると思うので紹介しておく。

S出版社から、ウィルバーの『意識のスペクトル（一）』が出版されたが、著者名が小さく英語で書かれてあった。この本を読者に届けるには、ウィルバーの名前は不可欠であり、ウィルバーの最新刊であることが何よりもセールスポイントであつたはずである。その為にはウィルバーの名前は表紙に大きく表示されるべきだったことは明らかである。さて、この事を指摘する書店が何軒あったか

である。営業マンの訪問する書店全てで、そのことが指摘されたとなると、事前にウィルバーのことが伝えられていた、という意味において営業は成功していたと言えるだろう。もし一軒でもそれを指摘しなかったとしたら、その店に情報が伝わっていなかったということになるのではないだろうか。

もうひとつは、M出版社から、ブローデルの『日常性の構造（一）』が出版され、その本は歴史のみならず思想的にも価値の高い本であり、その出版が待たれていたものである。確かにその通り、発売後すぐによく売れたのであるが、正直なところ、私の不勉強もあり、なぜ売れるのかしばらくわからなかったのである。そのことで、より積極的な販売ができなかった事を今も後悔している。

以上の例から言えることは、情報の欠乏が、かなりの売り損じを生む原因になっているということである。私は日頃、版元営業マンに、新刊であれば、どのような内容であるかということは必ず聞くようにし、売れば、なぜ売れるのか、というその背景を探るようにしている。小さな事の積み重ねではあるが、販売のヒントはその中から必ず発見できると信じている。版元営業マンとの接

触は、その機会を大きくしてくれるものである。このように情報は私にとって武器であり、読者との接点を拡大する道具なのである。

それではこの情報の活用が人文書不振の決定的な打開策かと言うと、もちろんそうではないのだ。多品種少量生産の典型である人文書であるが、書店においては多品種多量販売をしないと生きられない仕組みがある以上、一冊一冊の本を我慢強く売り続けることに、限界があるのは当然のことである。文庫・コミックなど大量生産大量販売型商品が書店経営のある部分を支えているという現実があれば、専門書の販売がある意味で効率の悪い部分ということにもなりかねないのである。しかし効率主義による書店の商品構成が、客離れをひき起こす要因になっていることは明らかなのである。とすれば人文書の効率的な販売とは何なのかということだが、ここで言う効率率的とは、回転率による効率という意味ではなく、情報不足による書店内商品の孤立化（棚には一応あるが：というケース）をできる限り少なくするということである。それは、多品種少量生産のジャンルであり、どの書店でも扱える商品ではないという前提に立った書店と

版元の相互理解が必要であると言えるのではないだろうか。生んだのは私（版元）、育てるのはあなた（書店）、というのでは、生まれた子供（本）は可愛そうである。人文書の売上げを伸ばすために我々に求められているのは、根気のいる仕事ではあるが、本に情報という水を与えることによって商品を活性化させることではないだろうか。それは版元と書店の努力によって成し得る仕事ではないかと思う。

人文書は今、大きな転換期を迎えている。それを私たちはしっかりと受け止め、読者に本を提供しなければならぬと思う。こうした大切な時期に、人文会各社との合同研修会を持つ機会を得たことは、当社と各版元の共同作業を進めてゆく上の第一歩だったと私は考えている。

※「人文会ニュース」前号で発表いたしました人文会特約店一覧に掲載漏れが生じました。お詫びして、訂正いたします。

特約店 ▲北九州▽ナガリ書店

準特約店 ▲愛知県▽日本福祉大生協

※尚、掲載書店名、地名など一部厳密さを欠きました。お許し願います。

書店ルポ①

神田・東京堂

本の街・神田神保町の一角、ずずらん通りに面している六階建ての瀟洒なビル、そこが今回訪問した東京堂書店である。明治二十三年に開業、今年は九五周年というから、書店業界でも屈指の老舗のひとつと言っているだろう。

かつての学生街・神保町周辺も、相次ぐ大学の郊外移転にともなって次第次第にオフィス街、商業の街に変貌しつつある。地盤沈下がささやかれる昨今の神保町界隈であるが、にもかかわらず三省堂、書泉などをはじめ大型書店がたちならび、活況を呈しているようにみえる。

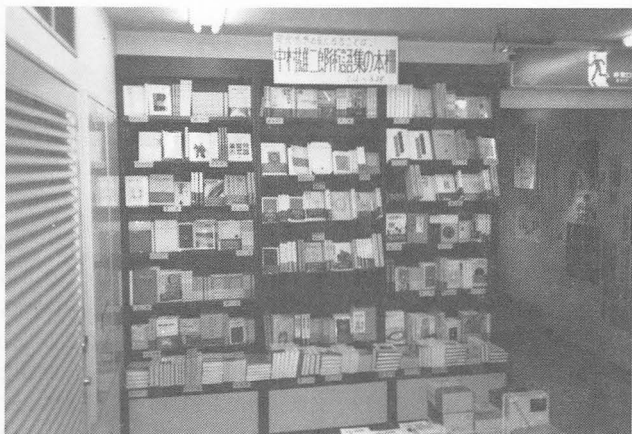
そんななかで東京堂もまた、三年まえの一九八二年十二月、従来の木造二階建ての旧店舗から、総面積四五〇坪の新店舗をもってこの地区の激烈な販売合戦に復帰した。そのあたりの販売戦略や独自の工夫などについて、

仕入責任者の佐野衛氏、人文書担当の小島清孝氏に率直な意見を聞いてみた。以下がそのレポートである。

東京堂はもともと文芸書と人文書が強く、その方面での専門書店として知られていた。同じ神保町で学参の三省堂、一般書の書泉と比較しても、その特徴はかなり際立っていたと言っている。しかし最近の軒並みの大型店化にともなって、それぞれの店の持味が急速に薄らいできたのも否めない事実であって、この点を佐野氏は次のように語ってくれた。「この三省堂ではとんどの本が入ってしまう。だから店の特徴を出すのがむずかしい。東京堂では旧店舗で良かった文芸書と人文書関係でお客をつかんでいこうという方針で、とくに人文書は場所的にもスペース的にもかなり優遇しましたね。たとえば社会問題関係のマーイナーな部分で結構お客さんが来るんですね。

単品で百冊、二百冊売れるということはないんだけど、そういうものが置いてあるんで来られるお客さんが多いようです。」

たしかに、三階の人文書売場（94坪）を見て回ると、それぞれの棚は専門ごとに分類されており、平台なども書評類を参考にキメ細かく変化をつけているようである。新刊のフォーローなども専門取次店や版元を周辺にもつ神田地区の利点を生かした対策を立てているという。このような東京堂の戦略は、三階入口に常設しているミニ・コーナー（写真参照）などによって、たえず新しい切り口による専門書の見直し、人文書の再検討がおこなわれていることに典型的に見てとれよう。このコーナーは月に一回ずつ、片寄らないよう配慮しながらいろいろなジャンルにわたる催しをおこなっており、なかなか好調の売行きを示しているようだ。そこでの経験が棚の構成においても生かされているの言うまでもないだろう。単品だけで売りたいという考えが強くあるようだ。このコーナーはだいたい三階のフロア長でもある小島氏を中心に発案されているようであるが、そのヒントは各版元



の営業マンとの話し合いのなかから出てきているそうだ。

そうした東京堂の姿勢は、お客との対話を重んじる伝統的な態度にも見られる。裏通り

に立地するという不利な条件もあるのかもしれないが、わざわざ来てくれるお客さんを大事にしてきたために、いまだに遠くから足を運んでくれる読者は多いようだ。そう言えば、最近はそのような書店が減ってきて、当面の売上げさえ伸ばせばそれでいいという本屋が多くなった。そんな風潮に反発するかのようになり、「お客さんに聞かれて本がないというようなことがあることも残念で、そういう本は必ず注文で入れるようにしてゐるんです」と小島氏は苦笑いしながら言われた。実に手のかかることをやっているわけだ。取次を通さない（通せない）ような小出版社とか同人誌などとも直接取引したりしており、そういうところまで目を届かせているのもこの書店の大きな特徴である。常備にしても新刊にしても均一化されてきているなかで掘り出しものを見つけて並べたいという気持が強い。こういう書店人気質もいまや珍しい類の存在になったかもしれない。東京堂にはそういうヒューマナな風風が色濃く残っているのである。

また、東京堂がやろうとしていることのひとつに、ふつうの書店ではやれないような文

化事業の試みがある。書店としての立場をもったミニコミ誌を出してみたい（佐野氏の話）というのもそのひとつのあらわれだ。あるいはまた、昨年から始めた「エスパース・デポック」という講座ものもなかなか評判で、たとえば今年の講師陣は岩井克人、柄合行人、沢木耕太郎、古井由吉といった著名な思想家や作家を招き、六階の「文化サロン」にておこなわれた。こうした文化事業が書店業の一環としてとらえられているところに、東京堂らしさがあると言えるのかもしれない。

そうは言っても、総じていえば、理想と現実との開きは大きくて、やはり営利である以上、方針どろりにはいかなない悩みもあるようだ。小島氏も言うように、実際に本を並べ、売っていくところでは「無思想」と言われても仕方のない側面は拭いがたい。その現実をどうしたら理想に近づけることができるかというところで、とりわけ人文書の販売との関連において関心をもちたざるをえないわれわれとしては、切実な共感をもったのである。

（6月24日、東京堂にて取材。）

文責・弘報委員 西谷能英（こやかねひさ）

人文会会員名簿

(113-91 東京都文京区 本郷局私書函89号)

60. 8. 現在

	社名	担当者	〒番号	所在地	電話
幹事	青木書店	山根 襄	101	千代田区神田神保町1-60	292-0481
幹事	大月書店	原田 敦雄	113	文京区本郷2-11-9	813-4651
	御茶の水書房	橋本 盛作	102	千代田区九段北1-8-2	230-2510
幹事	紀伊國屋書店	佐久間健雄	156	世田谷区桜丘5-38-1	439-0125
	勁草書房	石橋 雄二	112	文京区後楽2-23-15	815-5277
幹事	社会思想社	渡辺 和彦	113	文京区本郷1-25-21	813-8105
幹事	春秋社	神田 治	101	千代田区外神田2-18-6	255-9611
	晶文社	萬洲 隆男	101	千代田区外神田2-1-12	255-4501
	誠信書房	濱地 正憲	112	文京区大塚3-20-6	946-5666
	創元社	重光 義彦	162	新宿区山吹町77	269-1051
幹事	筑摩書房	菊池 明郎	101	千代田区神田小川町2-8	291-7651
	東海大学出版会	岡田栄三郎	160	新宿区新宿3-27-4 東海ビル	356-1541
休会中	東京創元社		162	新宿区新小川町1-5	268-8231
会長	東京大学出版会	中平千三郎	113	文京区本郷7-3-1	821-2111 内7955
	〃	竹内 康一		〃	811-8814
	日本評論社	後藤 光行	160	新宿区須賀町14	341-6161
	福村出版	福村 惇一	112	文京区小石川1-3-17	813-3981
	平凡社	伊藤 隆	102	千代田区三番町5 Kビル	265-0455
	法政大学出版局	市川 昭夫	102	千代田区富士見2-17-1 法政大学構内	237-1731
代表幹事	みすず書房	相田 良雄	113	文京区本郷5-32-21	814-0131
	未来社	西谷 能英	112	文京区小石川3-7-2	814-5521
	雄山閣出版	武 一雄	102	千代田区富士見2-6-9	262-3231
	有斐閣	佐藤 進	101	千代田区神田神保町2-17	265-6811
	吉川弘文館	川越 重行	113	文京区本郷7-2-8	813-9151

販売委員会 ◎菊池 ○萬洲 石橋 後藤 伊藤 佐藤 川越

弘報委員会 ◎原田 ○橋本 岡田 西谷 武

調査・企画委員会 ◎渡辺 ○竹内 濱地 重光 福村 市川

◎印は委員長 ○印は副委員長

誠信書房

東京都文京区大塚3-20-6

融合する心と脳

科学と価値観の優先順位
R・スペリール／須田 勇・足立千鶴子 訳
心、科学と価値 部分と全体 これらの謎に、
ノーベル賞受賞の著者が挑む。 一八〇〇円

言語・思想叢書

精神分析の認識論

A・ロレンツァー／河田 晃訳
意識形成を科学的に厳密に規定し、社会的にも
も堅固な基盤の上に据えた。 三八〇〇円

蘆花日記

●全7巻 監修／中野好夫・横山春一 校注／吉田正信
純粹無難な真実の追求者で、同時に矛盾撞着の
人でもあった作家徳富蘆花の赤裸々な記録。
稀有な人間記録であり、大正文学史・社会史の貴重な資料で
ある秘められた日記を、無削除、伏字なしに初公刊する。

第1回・第1巻 大正3年5月～4年6月 4500円
第2回・第2巻 大正4年7月～5年5月 4500円

東京神田 筑摩書房 小川町2

命名の言語学

ネーミングの諸相



森岡健二 著
山口仲美 著
「名」のもつ神
秘性と「名づけ」
の構造に科学
のメスを入れ
る。ネーミング
の歴史はおも
しろい。「ウル
クス」=「空
ス」? 2000円

東海大学出版会

東京都新宿区新宿3-27-4東海ビル

創元社

女性の神秘

月の神話と女性原理

E・ハーディング／樋口和彦・武田憲道
訳 月の神話、宗教の象徴的分析から女
性原理を解明。ユング心理学選書2000円

女性の心の成熟

玉谷直実 女性の思春期から中年期まで
の内的成熟の道筋を、事例や神話、おと
ぎ話を引きつつ、深く考察する。1200円

箱庭療法 基礎的研究と実践

木村晴子 臨床的・実践的見地と、
客観的・基礎的研究との統合をめざ
した著者長年の成果を集約。2500円

大阪市北区西天満1-4-2
東京都新宿区山吹町77

法政大学出版局

元型の空間

E.ゾラ ショー マニズムから政治・時に
形而上的経験に寄る深淵として捉え、丸小哲雄訳 2800円

わが子を愛するのは たやすいことではない

G.スニデルス 自ら、検討したつたま
科学の成果を比較の経験をつたつたま
の子と親の関係を解き明かしたみ訳 2800円

ルフィー、あるいは取り壊し

J.アメリー<ロマン・エッセ>想像と
現実を交錯させ、物語の中に批評をちり
はめてくアウシュヴィツ以後の精神
の崩壊を描く異色作。神崎蔵訳 2200円

日本ルネッサンス史論

福本 和夫 封建制を掘り崩す町人文化の
＜復古生新＞の実態を探る。1万5000円

東京都千代田区富士見2電話03-237-1731

東京裁判

R・H・マイニア著／安藤仁介訳

勝者の裁き 東京裁判の膨大な公判記録は、
戦後四〇年を経る現在でも我々に様々な示唆
を与える。裁判の全貌を実証的に捉えようと
する本書は、記録を忠実に要約しつつ、国際
法、法手続、史実の三点から問題点を提起し、
批判する。

四六判／一六〇〇円

東京・文京 小石川1-3 福村出版 電話(03) 813-3981

明るい部屋

写真についての覚書

ロラン・バルト 現象学的方法によって写真の本質を探索し
同時に、亡き母を発見する写真論II物語。花輪光訳 3000円

ゴシックの大聖堂

ゴシック建築の起源

ジムソン 西洋建築の偉業の源泉を探り、その成立の背景を
解明。シャルトル大聖堂等写真図版53。前川道郎訳 3000円

俳論・エッセイ

（第5回）

子規に芽ばえ處子に熟した現代俳句史を展望する十六篇のは
か、昭和10、24年執筆の五十篇を収録。竹中宏解説 3000円

日記・書簡

朝永振一郎著集・別巻2

若き日の心の葛藤を綴った書簡日記全文を収録。他に晩年の
病床日記と仁科・湯川博士への書簡。小林悦解説 3000円

東京文京本郷
3丁目17-15

みすず書房

*9月刊
*内容見本呈

フランス百科 全書絵引

監修・解説II
ジャック・
ブルースト

デイドロが心血を注いで記録した18世紀の文化、
技術、学問のすべて、『百科全書』図版集の覆刻版。
銅版による精細な図案3,000(B4変・880頁)
●特別定価25,000円(85.12.31まで)定価28,000円

平凡社

〒102東京都千代田区三番町5
振替・東京8-29639

往年の名女優田村秋子の見事な最晩年を描ききった佳品

花の別れ

田村秋子とわたし

豊田正子著

著者と田村秋子の奇しき出会いから七七歳での死を看取る最後の二年間、二人の間にどのような会話がなされたのか。その感動深い交流を描く。

四六判10ポ2四〇頁・定価一三〇〇円

土岐雄三編

山本周五郎からの手紙

竹内紀吉著

定価二二〇〇円

図書館の街浦安 新任館長奮戦記

東京都文京区
小石川3-7-2

未来社

電話・代表
(814) 5521

玉砕の島 繁栄の島

アジア・太平洋現代史を歩く 小林英夫著 一〇〇〇円
東南アジア・南太平洋へ旅立つ日本人は年々増えている。ある者はレジャーで、ある者はビジネスで、四十年前の激戦の地も大きく変った。現代史研究者が現地を旅しつつ考える。

道徳的行動の心理学

自己抑制と愛他行動の形成 中里至正著 一四〇〇円
他者への愛・思いやりの心は何處ごろどどのようにして育つのだろうか。この「道徳的行動」の発達と形成に関する永年の実験的研究を紹介し、それをいかに育ててゆくかを説く。

有斐閣

東京神田神保町
電 03-264-1311

たべもの 語源考

平野雅章

日本料理の名前の由来を、海のさち、山のさち、料理の部に分けて説きあかす。食の楽しみをいや増す興味つきぬ書。

1600円

黄河・シルクロード の考古学

松崎寿和

北京原人の発見から、秦漢帝国の出現までをとらえ、シルクロードから黄河へとつながる中国文明に焦点をあてる。

1800円

雄山閣

千代田区富士見2／振替東京3-1685

〈江戸〉選書

第一期 全10冊 完結

北原進著

定価二二〇〇円

江戸の札差

旗本八万騎の俸禄米を富の源泉として大をなした金貨し札差は最も江戸的な高利貸資本といえる。本書は多彩な角度からその実態を解明し、江戸文化に果たした役割をも探る。新刊二八頁

江戸ッ子 西山松之助著
大江戸の成立 芳賀 登著
江戸の開帳 比留間尚著
江戸の町役人 吉原健一 郎著
江戸の禁書 今田洋三著
江戸の米屋 土肥鑑高著
江戸店犯科帳 林 玲子著
江戸の夢の島 伊藤好一著
定価各二二〇〇円（内容見本書）

吉川弘文館

東京都文京区本郷7-2-8

御茶の水書房

続刊

第3巻 韓国民族運動史論 姜萬吉
第4巻 民族文化運動の状況と論理 白來晴
第5巻 日本帝國主義と朝鮮民衆 宮嶋博史

好評発売中
第1巻 分断民族の苦悩 李泳權著
第2巻 資本主義と民族運動 朴玄塚著

韓国現代社会叢書
高崎宗司訳
滝沢秀樹訳

新しい歴史の形成に向けて、その内的振動を探り続ける韓国民衆からの問いかけ、
滝沢秀樹・安東直編 全5巻／四六判／各2500円

東京・九段北1-8-2／☎03(265)5746

哲学辞典

第四版

マルクス主義の立場から編集された初めての本格的な哲学辞典として好評のロングセラー！ 第四版では、第三版発刊以来一〇余年の哲学思想の推移をふまえ、第二回目の増補を行ない今日の必要にこたえた。さらに、巻末の索引を一新し、新たに欧文の人名・事項索引を付け加えた。

森 宏一編

（46判上製）定価四五〇〇円

東京神田 青木書店 神保町1

科学と知識社会学

M・マルケイ／堀喜望他訳 社会学における科学や自然科学の問題を駆け上り詳述する ■二五〇〇円

科学・哲学・社会

S・リチャーズ／岩坪紹夫訳 科学の哲学的基礎、科学と社会の相互作用等を考察する ■二八〇〇円

広告コミュニケーション 広告現象を解説する

G・ダイヤー／佐藤毅監訳 広告のメディア論から記号論まで、広告現象を解説する ■二五〇〇円

紀伊國屋書店

本店：東京都新宿区新宿3-17-7
出版部：東京都世田谷区桜丘5-38-1

非売品

大月書店

東京都文京区本郷2
電話 03 (813) 465196

拝啓マツカーサー 元帥様

占領下の日本人の手紙

袖井林二郎 46判力バー・定価1800円

天皇にかわる新しい偶像となったマツカーサーにあてて、日本人は数十万通にのぼるおびただしい手紙を書いた。そこには、おもねり、直言、哀訴、歓迎、進言など、ふだん深層にうずもれている日本人の本質を露わにしている。

回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印